

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第3回 「見立て」の醍醐味
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-02-28
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6230

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第3回

今回は「遊び」としての「一式飾り」の魅力について触れたが、それが一体どのように楽しめるものなのか、もっと掘り下げて考えてみたい。

そこで今回は、平田と並んで「一式飾り」が盛んな斐川町の直江の「直江一式飾り」を取り上げる。まずは写真をご覧いただきたい。写真に何が見えるだろうか。

これは2015年7月の「なおえ夏祭り」で、直江の中町の人たちが陶器一式を用いて制作した「孫悟空」という作品である。雲に乗って天空を駆ける孫悟空、すなわちサル姿が誰の目にも明らかであろう。

しかし、これは本当にサルだろうか。もつ一度、サルの顔をよくご覧になっていただきたい。そこに何か別の動物

が隠れてはいないだろうか。まだお分かりにならない方が、この年、平田や雲南の掛合の夏祭りでも、なぜか直江



は、写真を上下反対にして欲しい。種明かしすると、サルの顔と見えるのは、実は逆さまにした陶器のカエルの置物である。

と同様にカエルを用いた「孫悟空」の作品が登場した。それが偶然かどうか分からないが、概して出雲地方の「一式飾り」は、カエルやタヌキ、コイといった動物の陶器を好んで用いる。

カエルの利用を最初に思いついた人の発想には脱帽するしかない。カエルがサルに見えるという素朴な「見立て」の面白さ。これこそが「一式飾り」を作って楽しみ、見て楽しむ「遊び」の真骨頂、醍醐味ではないかと私は考えている。

制作に用いたカエルの置物は、大小合わせて6個。総勢9名で、保存会の方から手ほどきを受けながら、龍の口や目、ひげや角を分担して制作し、最後に合体させて木枠に吊るした。完成した作品は龍以外の何ものにも見えない出来栄であった。

紙面の関係でお見せできないのが残念だが、毎年陶器のカエルはさまざまな作品に用いられており、ある時は龍になったり、またある時はトナカイになったりと大活躍である。観客は作品にカエルを発見する度、その「見立て」のギャップの大きさに驚くと同時に、おかしさを感じてしまうのである。

所要時間は約3時間。制作中は私も若い学生たちも揃って作業に没頭し、一見単純な「見立て」の作業に、人はこんなに夢中になれるのかと、身をもって「遊び」の奥深さに気付かされた。

2016年11月、私は研究室の学生たちと共に、平田一式飾り保存会の皆さんのご協力

によって、実際にカエルの置物を使って龍の顔を見立てる貴重な体験をさせていただいた。制作に用いたカエルの置物は、大小合わせて6個。総勢9名で、保存会の方から手ほどきを受けながら、龍の口や目、ひげや角を分担して制作し、最後に合体させて木枠に吊るした。完成した作品は龍以外の何ものにも見えない出来栄であった。

「見立て」の醍醐味